

ポリネシアの核被害者、ヒナメラ・クロスさん

※2025年3月の毎日新聞記事を元にした文章と地図です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

祖母、叔母、母、姉、そして、私もがんになった――。フランスが核実験を行った仏領ポリネシアの国会議員、ヒナメラ・クロスさん。

時のポリネシア国内のほぼ全人口に当たる約11万人が「放射能汚染にさらされた」と2021年に指摘している。

3月3日（日本時間4日）から米国で開かれる核兵器禁止条約第3回締約国会議に出席し、核実験による被害者の救済を訴えるつもりだ。

「フランスは『核実験はクリーンだ』と言い続けてきた」。フランスの教育制度に基づく学校でも何も教えられなかった。そのため、

太平洋に位置するポリネシアは約120の島々からなる。1966〜96年に首都のあるタヒチ島から約1200^キ離れた二つの岩礁でフランスが193回の核実験を行った。

骨の苦しい痛みに襲われたりして、体がだるくて動けなくなったり、因だとは思わなかった。90〜00年代に親族が相次いで乳がんや甲状腺がんになり、クロスさんも13年、24歳の時に白血病と診断された。

核実験の資料は軍事機密とされ、被害者数も不明だ。だが、機密解除された資料を仏報道機関などが分析し、74年の核実験だけでも当

18年に仏政府に被害を訴える運動に興味を持ち、同年から自身の体験を公で語るようになった。22年にはNGOの招待で核禁条約の

第1回締約国会議に出席し、政治の世界に飛び込むことを決意。ポリネシアの国会議員となった。議会は23年、仏政府に締約国会議へのオブザーバー参加や条約への賛同を求める決議案を全会一致で採択した。

クロスさんは「医療の不足は大きな課題だ」と指摘する。がん治療をする主要な病院はタヒチ島に一つしかない。進行したがんを治療するには渡仏しなければならぬ。

クロスさんもタヒチの病院で、通常は麻酔をして行う骨髄の検査をフランス人医師によって麻酔なしで処置された。クロスさんは「同じ人間なのに先住民は丈夫だから痛みに耐えられる」という植民地主義的な考えを感じた」と振り返る。病院に行くことを拒む住民も多くないという。

教育の課題も大きいと感じる。クロスさんは長男に自身の病気と核実験との関連を教えてきた。だが、長男が8歳の時、治療に苦し

む母の姿を見て「パリに行って核爆弾を落として仕返ししたい」と口にするのを聞いて、間違った教え方をしてしまったと後悔した。

「過去の歴史を知るのは大切だが、憎しみを生んではいけない」

病気を心配して苦悩しながらも2年前に次男を出産した。息子たちは健康だが、将来がんを発症しないか不安は尽きない。若い世代には放射線の影響を心配して子どもを持たない選択肢をする人もいるという。

「母親として最大の願いは、子どもを守り、次の世代の人たちが核兵器のない平和な世界で育つこと。私たちの闘いは過去のためだけではなく、安全な未来をつくるためでもある」。クロスさんはその力を込める。

◎仏領ポリネシアの地図

